

January 28, 2021

クラシックフォルダー からモダンフォルダーへ の移行に関する検討事項

UiPath株式会社

ソリューション本部

セールスコンサルティング第3部



免責事項

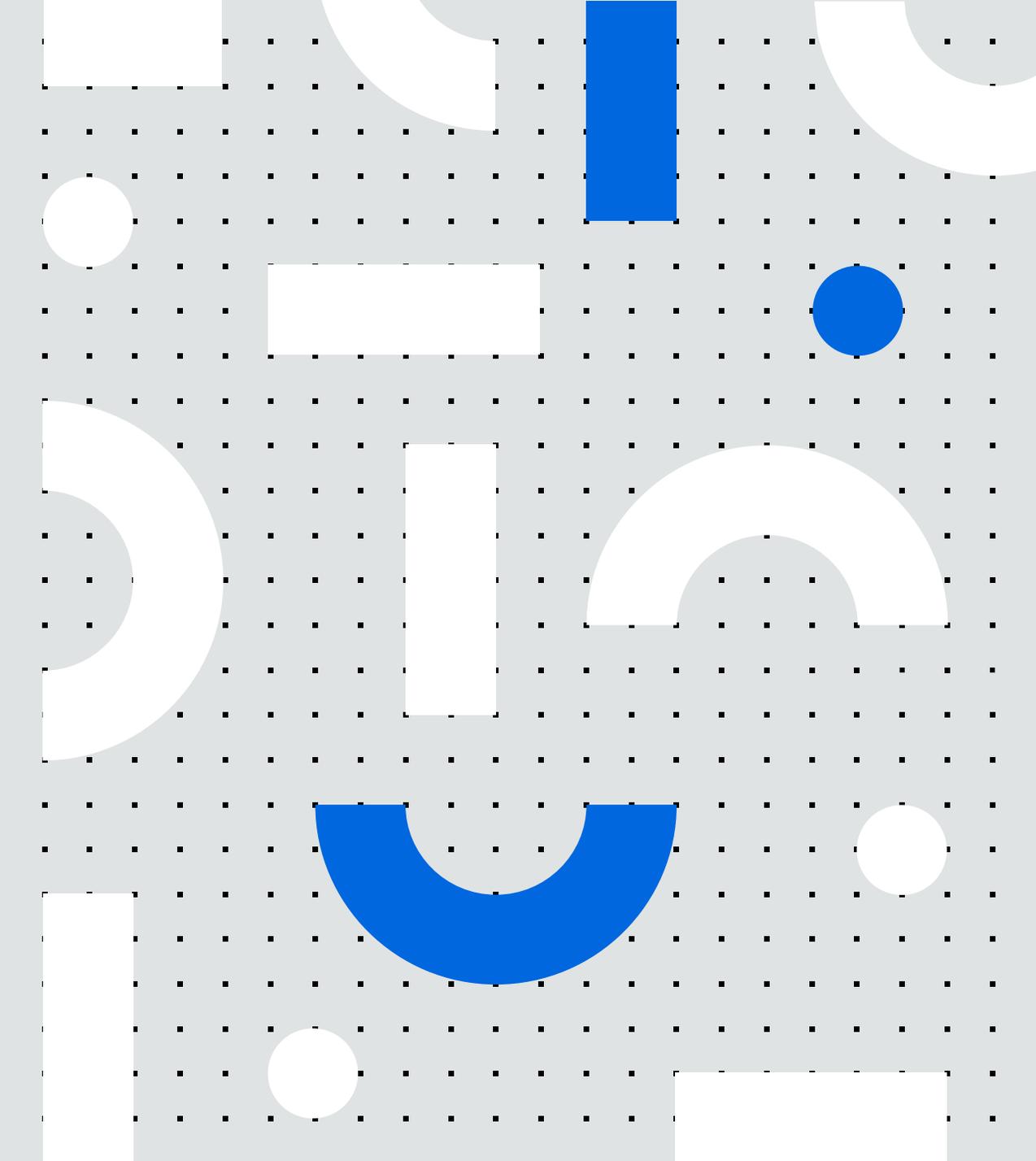
- 本資料は情報提供及び弊社製品の利用をご検討いただくことを目的とするものです。目的外のご利用はご遠慮ください。
- 本資料に記載されている情報については、弊社では細心の注意を払っておりますが、その正確性や妥当性を保証するものではありません。
- 本資料に記載されている情報は、参考情報として提供されるものであり何らの法的拘束力を有するものではありません。
最終的な契約条件は、当事者間で有効に締結される契約において確定されます。
- 本資料に関する一切の権利は弊社に帰属します。本資料に関する著作権は、弊社又はその他の権利者に帰属しており、著作権法その他の法令で保護されています。上記の目的を超えて、著作権者及びその他の権利者の許諾を得ることなく、これらの情報を使用(複製、改変、転載などを含みます)することは、著作権法により禁止されております。また、本資料で使用される会社名、製品の商品名及びロゴマークは、弊社、そのグループ会社、又はそれぞれの権利者に帰属している商標又は登録商標です。権利者の許諾を得ることなくこれらを使用することは法令により禁止されておりますので、事前に当社にご連絡の上許諾を得ていただくようお願いいたします。

Contents

1. はじめに
2. 移行するエンティティについて
3. ライセンスの考え方



1. はじめに



1. はじめに クラシックフォルダーとモダンフォルダーのリソース操作流れ

モダンフォルダーの特徴

- ユーザーに紐づくロボット (AR/ST/STX/STPro) の自動登録
- 階層構造 (最大7階層まで可能)
- きめ細やかなロール制御
- フォルダー権限に付与されたユーザーにプロセスが自動展開

※本資料は現時点の最新バージョン2020.10に基づいて作成しています。一部の内容は他のバージョンに適用できない場合があります。

※モダンフォルダーでUnattended Robotを使用するにはOrchestrator/Robotともにバージョン2020.4以降が必要となります。

クラシックフォルダー



モダンフォルダー

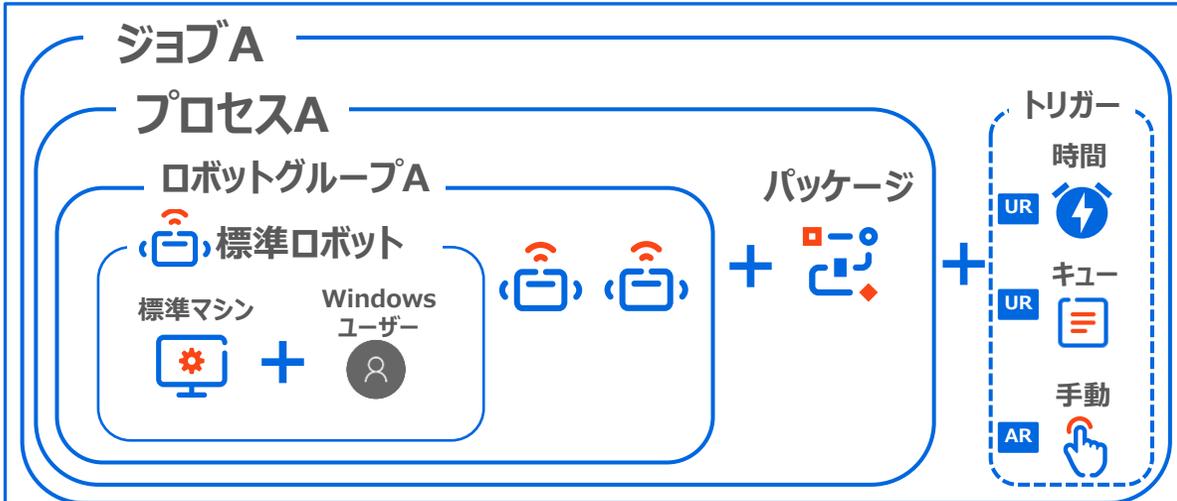


1. はじめに クラシックフォルダー廃止によるリソース依存関係の変化

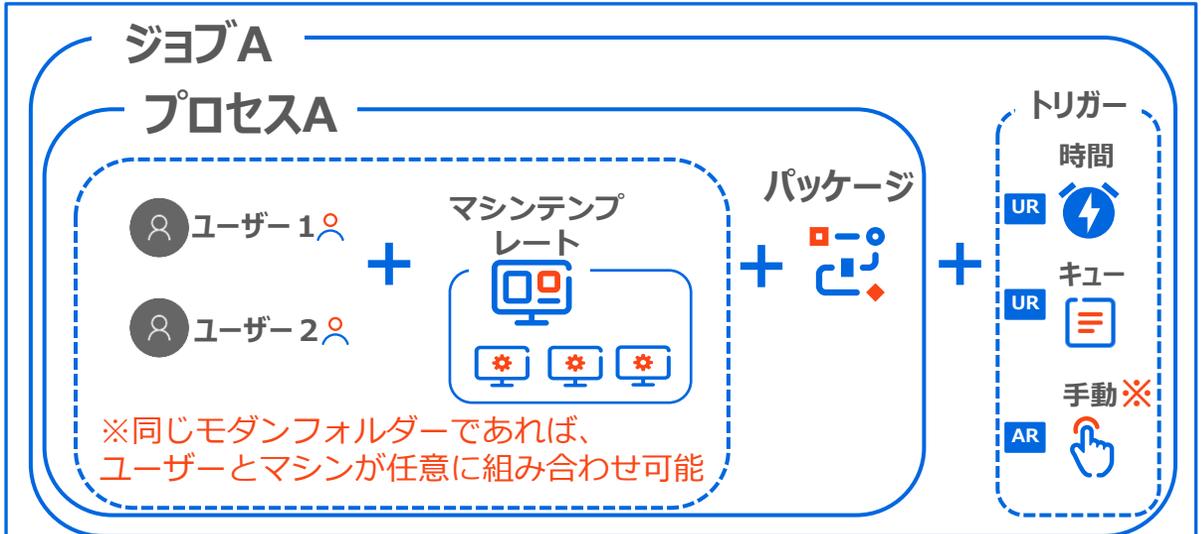
クラシックフォルダーの廃止※に伴い、標準マシン、標準ロボット、ロボットグループが無くなる。

※21.4で廃止予定は延期となり、廃止時期未定

• クラシックフォルダー



• モダンフォルダー



※手動でAttended実行の場合、テナントで定義されたマシンテンプレートに接続されている任意のマシンで、該当ユーザーが所属しているフォルダーのプロセスを実行できる。

- ✓ ユーザー登録時に、AR、ST、URなどのライセンスタイプを選択
- ✓ フローティングロボットのみ作成可能
- ✓ OCログインユーザーは、ロボット実行ユーザーの登録と同じタイミングに設定するため、OCのWebログインユーザーとロボットユーザーが一つになるように設定することが可能



1. はじめに クラシックフォルダーからモダンフォルダーへの移行について

移行の際には、エンティティを移動するのではなく、新しく作成する必要がある。これにより、必要に応じて旧エンティティに戻すことができる。特に、モダンフォルダーの正常稼働を確認できるまでは2つのバージョンを並行して実行できるようにする。

クラシックフォルダー



モダンフォルダー



移行作業流程の考え方



※APIを利用しているプロセスの改修が必要

改修する必要のある場合がある。モダンフォルダーのロボットは独立したエンティティではないため、ロボットに関連するAPI呼び出し方が異なる。

例えば、従来の"/odata/Robots" エンドポイントを利用したデータ取得は、モダンフォルダーでは機能しない。

1. はじめに

一般的な移行手順

クラシックフォルダーの各種エンティティをモダンフォルダーに移行するための一般的な実行手順を提示している。

注：この手順はすべてのオプションを含めていないため、それぞれのケースに合わせてカスタマイズ化した上、ご利用ください。

1

モダンフォルダーの新構成を作成

- Unattended実行の場合、従来の各Unattendedロボットグループをそれぞれサブフォルダーに切り替える。

2

プロセスをデプロイ

- プロセスに UiPath.System.Activities パッケージが使用されている場合、19.9 以上のバージョンが必要である※ため、それらをOrchestratorに再パブリッシュする。※詳細は17スライド目へ参照

3

Attendedロボットを作成し、ユーザーをモダンフォルダーへ割り当て

- ユーザー編集画面よりAttendedロボットを自動生成して、該当ユーザーを実行するプロセスがあるモダンフォルダーに割り当てる。

4

Unattendedロボット、マシンテンプレートを作成し、モダンフォルダーへ割り当て

- 同じモダンフォルダー中にある任意のユーザーとマシンテンプレートに所属する任意のマシンを組み合わせ、スケジュールでジョブを実行する。

5

従来のエンティティを無効にして、新構成のエンティティを検証稼働

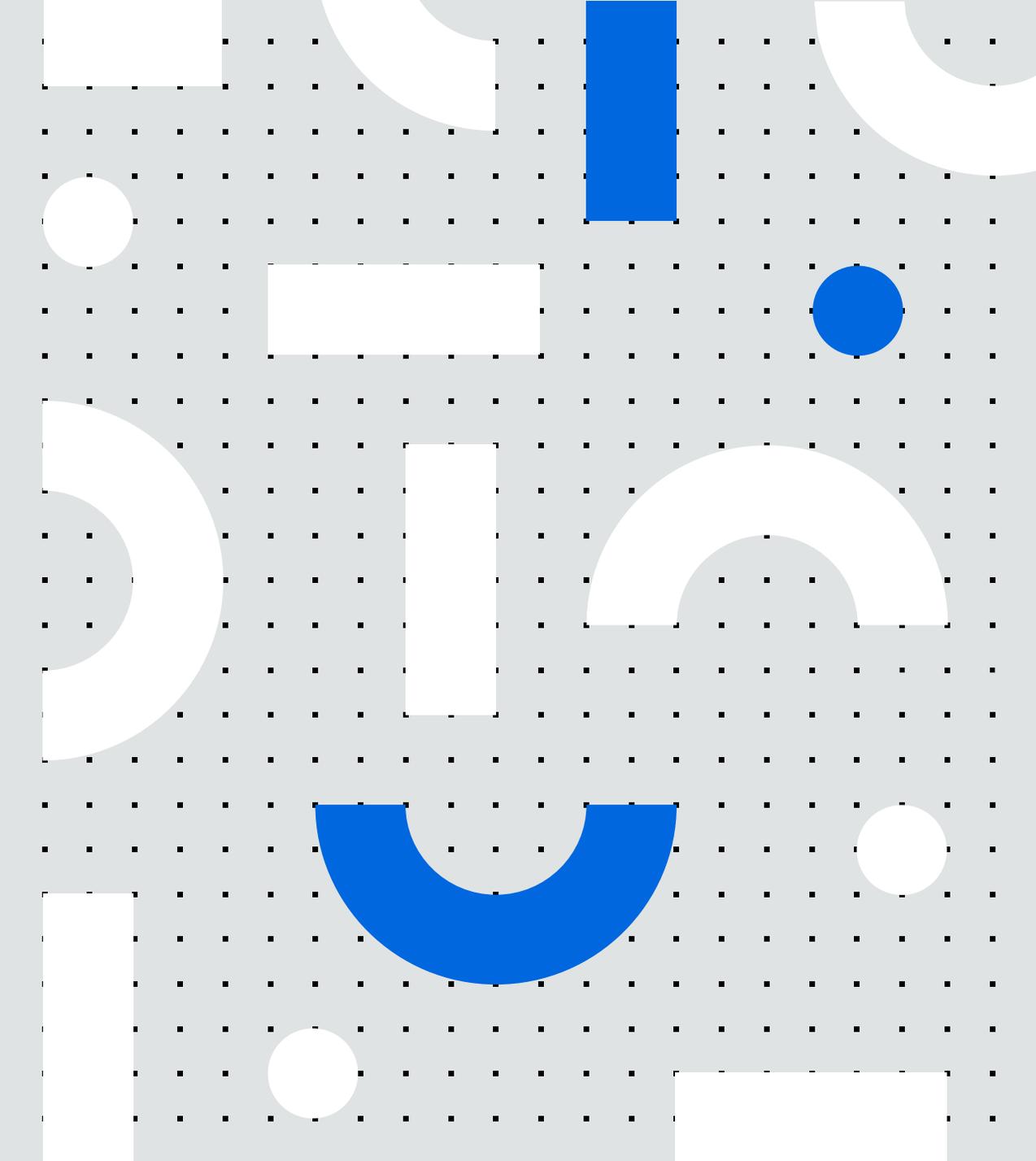
- 従来のロボットを無効化してから、新ロボットや他のエンティティが正常に機能することを確認する。

6

クラシックフォルダーの構成を削除

- キュー履歴を保持する場合は、モダンフォルダーからテストバージョンを削除し、元のキューをクラシックからモダンに移動する。また、クラシックから必要なログをエクスポートする。

2. 移行するエンティティ について



2. 移行するエンティティについて エンティティ概要

移行対象のエンティティは以下の通りである。

エンティティ	移行作業概要
マシン	標準マシンが廃止、マシンテンプレートへ変更
マシンテンプレート	AR、URともマシンテンプレートを利用するように変更
ロール	「テナントアクセス許可」と「フォルダーアクセス許可」ロールの定義、設定
ユーザー/グループ	Orchestratorユーザーとロボットユーザーの定義、設定
ロボット	標準ロボットが廃止、フローティングロボットへ変更
プロセス	モダンフォルダーごとのエンティティになるように変更
アセット	モダンフォルダーごとのエンティティになるように変更
キュー	モダンフォルダーごとのエンティティになるように変更

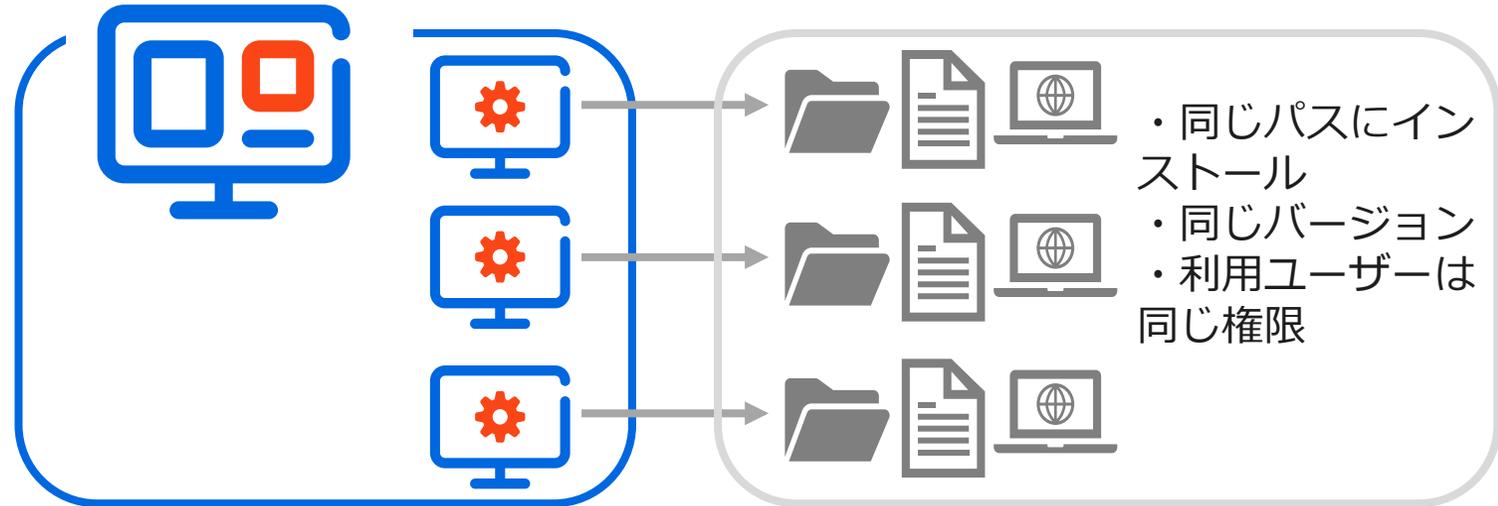
2. 移行するエンティティについて マシン

- マシンテンプレートを作成する。
- 標準マシンがなくなるため、マシンテンプレートに移行する必要がある。

標準マシン



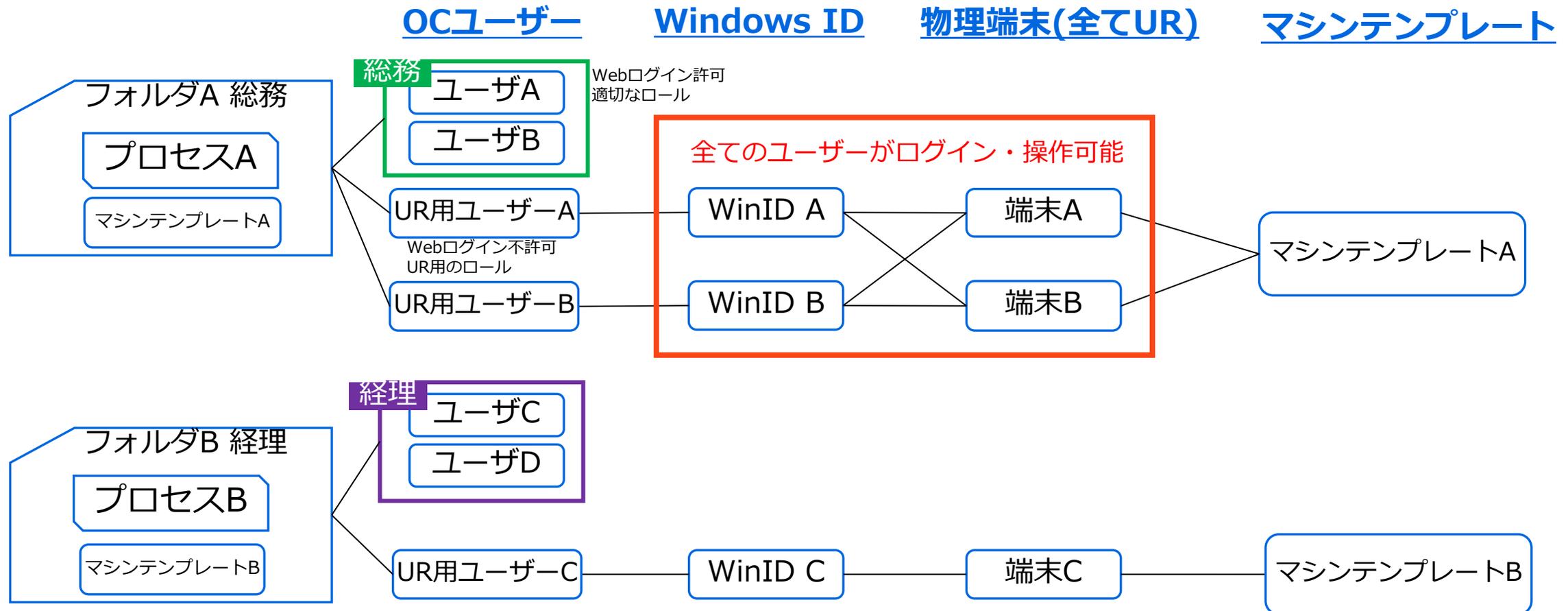
マシンテンプレート



- 同じマシンテンプレートに接続されている全てのマシンは、実行環境のセットアップが同じであることを推奨。
- 対象のアプリケーションを各マシンの同じパスにインストールし、すべて同じバージョンを設定することを推奨。
- 同じマシンテンプレートのマシンでアプリケーションにログインするユーザーは、すべて同じ役割/権限を持ち、アプリケーションの同じメニューにアクセスする必要がある。

2. 移行するエンティティについて マシンテンプレート

- AR、URともマシンテンプレートを利用するように変更する。
- UR実行の時間トリガーでは、フォルダーに割り当てられた任意のユーザーで（特定のユーザーが手動で選択されていない限り）任意のマシンとジョブを起動できるため、該当フォルダーに割り当てた全てのマシンにログインできる、自動化操作できることが必要である。



2. 移行するエンティティについて ロール

- 「テナントアクセス許可」と「フォルダーアクセス許可」ロールを定義、設定する。
- モダンフォルダーへの移行では、従来のロールごとに、「テナントアクセス許可」のロールと「フォルダーアクセス許可」のロールの2つを別々で定義することを推奨する。

	<input type="checkbox"/> 閲覧	<input type="checkbox"/> 編集	<input type="checkbox"/> 作成	<input type="checkbox"/> 削除
<input type="checkbox"/> アラート	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/> 監査証跡	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/> バックグラウンド タスク	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

既定のロール :

モダン フォルダーのロール

Tenant Administrator ロール

既定では、このロールには以下の権限が割り当てられますが、編集できます。

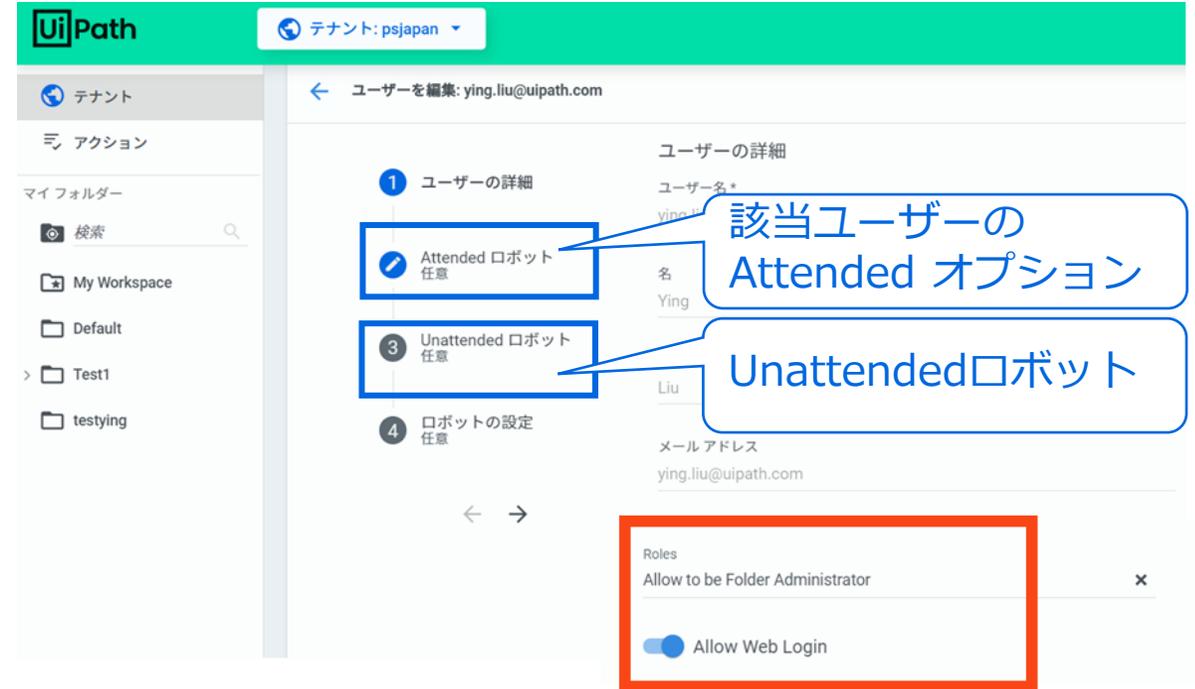
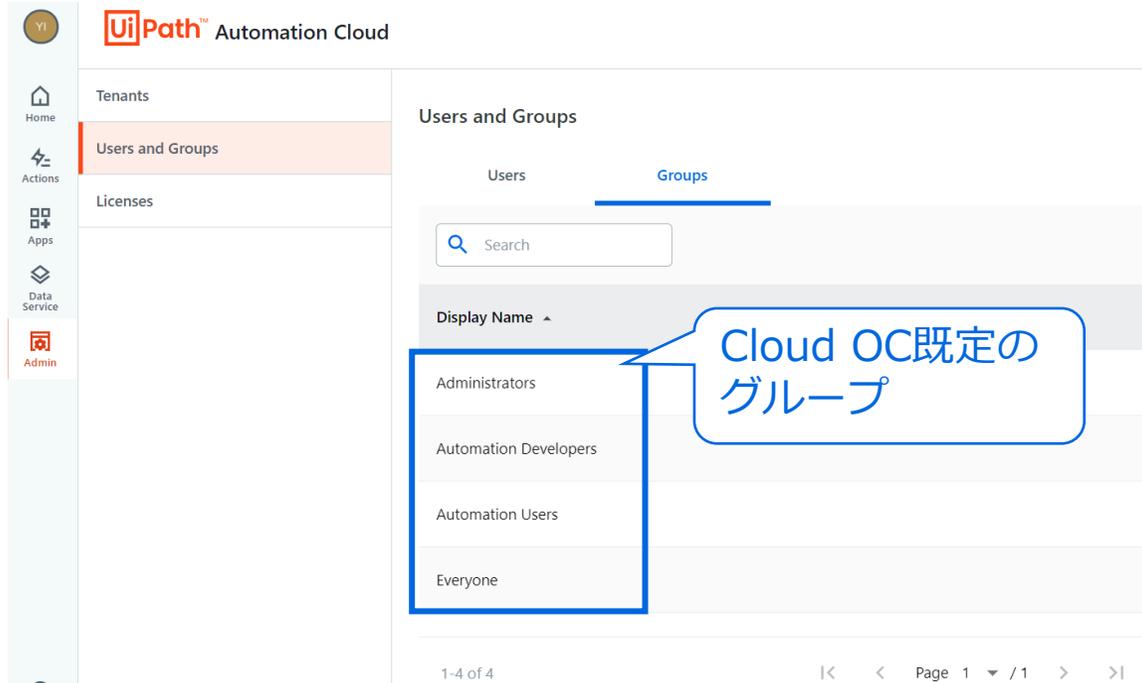
テナントアクセス許可	フォルダー アクセス許可
<input checked="" type="checkbox"/> View	<input checked="" type="checkbox"/> Edit
<input checked="" type="checkbox"/> Create	<input checked="" type="checkbox"/> Delete
<input checked="" type="checkbox"/> Alerts	<input checked="" type="checkbox"/>
<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

<https://docs.uipath.com/orchestrator/docs/default-roles>

- 同じユーザー/グループの異なるフォルダーへのアクセスをより適切に制御できる。
- フォルダーごとに役割に応じて細かくロールを設定できるようになる。例： Aさんは、フォルダーAのプロセス開発者とフォルダーBの実行者である。

2. 移行するエンティティについて ユーザーとグループ

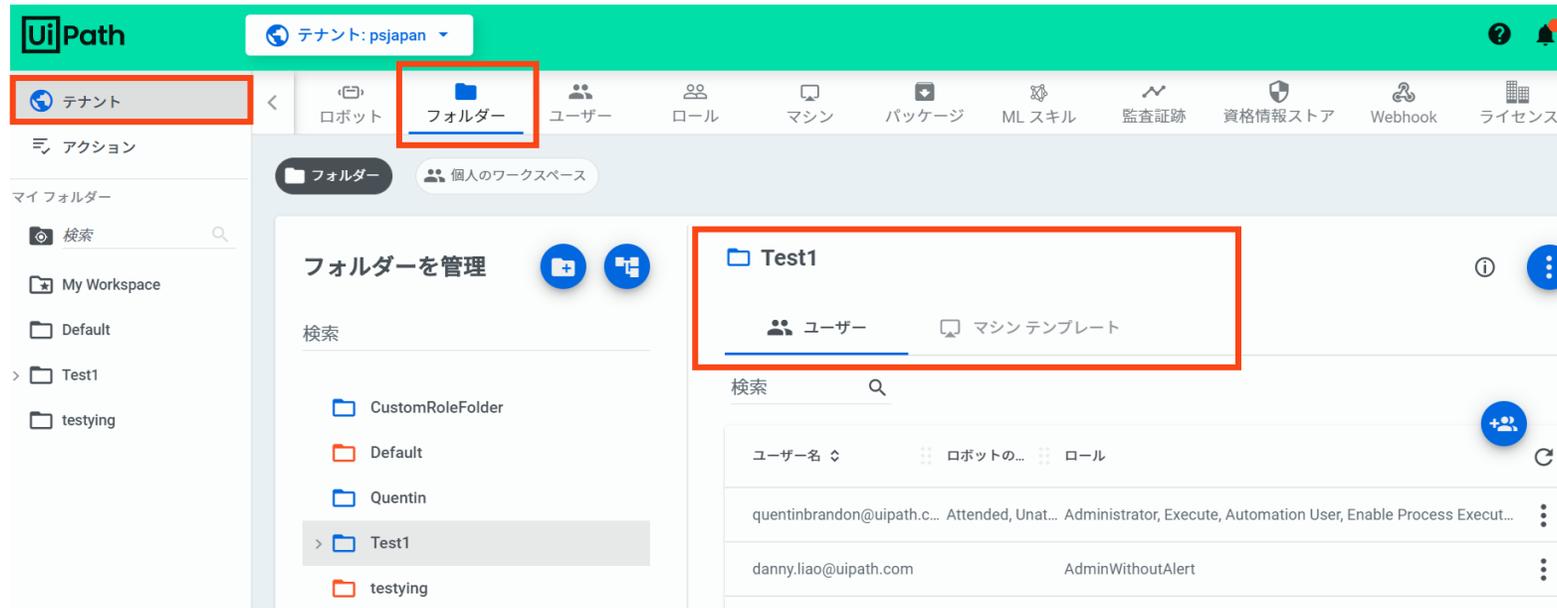
- Orchestratorユーザーとロボットユーザーを定義、設定する。
- 実際のOrchestratorユーザーだけでなく、ロボットユーザーに対してもユーザーを定義する必要がある。



- Cloud Orchestratorの場合、組織の管理者はユーザーを組織に招待し、すぐに使用できるUiPathの既定グループの1つに直接割り当てることができる。
- ユーザーの詳細画面に、ユーザーまたはグループが持つロール、およびWebログインを許可するかどうかを指定できる。グループの場合、これらの設定はグループのすべてのメンバーに継承される。

2. 移行するエンティティについて ユーザー/グループをフォルダーへ割り当て

- ユーザー/グループを作成したら、それらを特定のフォルダーに割り当てる。

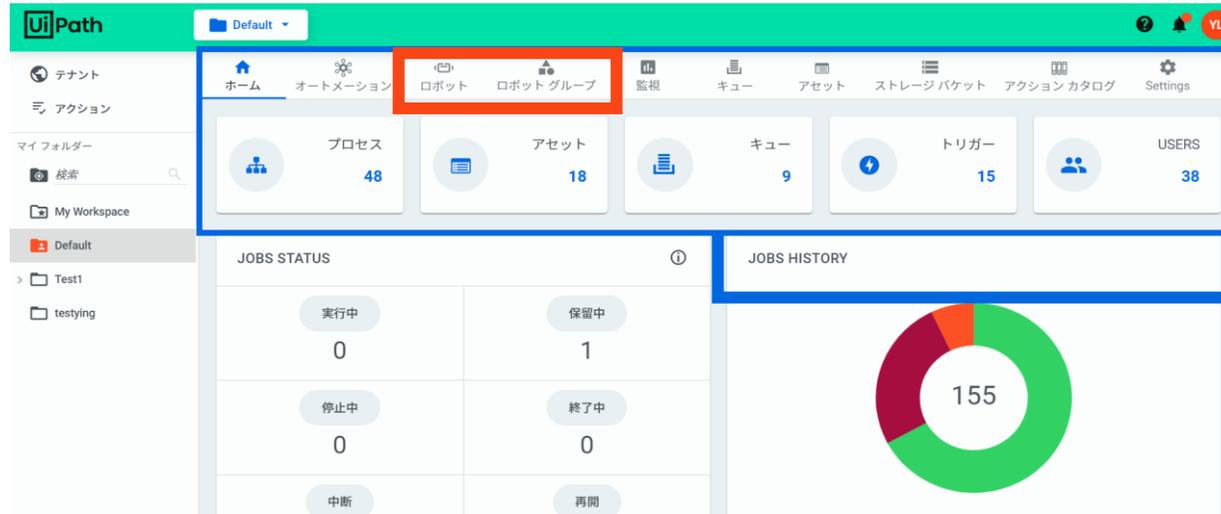


- Unattended実行の場合、フォルダーに割り当てられたすべてのユーザーが、そのフォルダーに割り当てられたマシンテンプレート内のすべてのマシンにログオンできることを確認することが重要である。
- フォルダー階層の親フォルダーに割り当てられると、ユーザーは、特定のフォルダーの下に作成されたすべてのサブフォルダーに自動的にアクセスできる。
- 親フォルダーレベルで割り当てられた権限の上に新しい権限をサブフォルダーに追加できるが、継承された役割を削除することはできない。

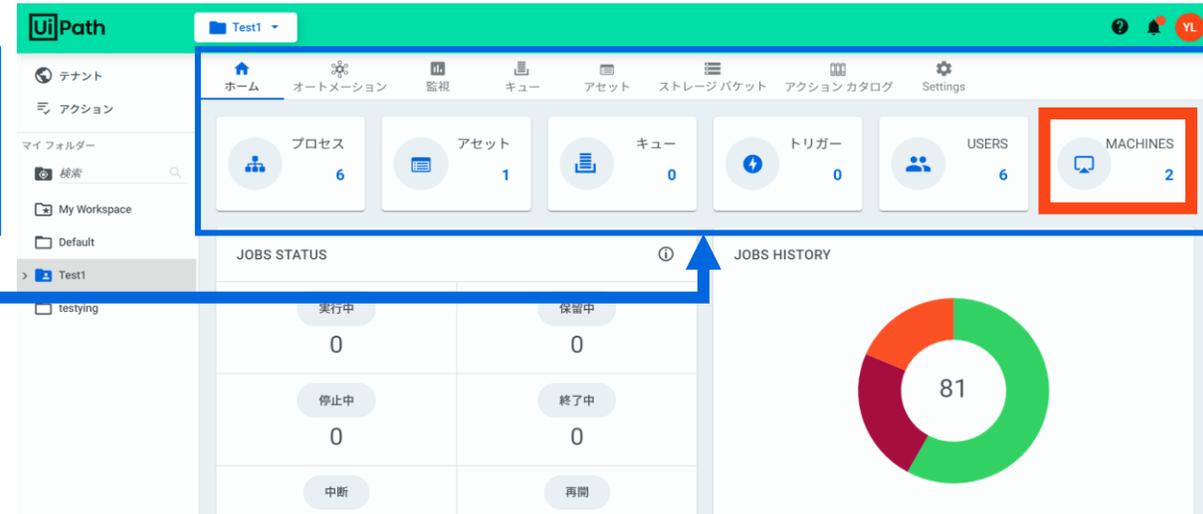
2. 移行するエンティティについて ロボット

- 標準ロボットは廃止されるため、フローティングロボットを利用する。
- モダンフォルダー内のすべてのロボットはフローティングロボットであり、ロボットの作成は自動的に処理される。

クラシックフォルダー



モダンフォルダー



- ロボットは、ユーザーと同じフォルダーに割り当てられたマシンテンプレートのいずれかに接続されている任意のマシンで、特定のユーザーの下で実行できる。
- Attended実行の場合、ユーザーはマシンテンプレートが割り当てられているフォルダーに関係なく、**テナントで定義されたマシンテンプレートに接続されている任意のマシン**で、Attendedロボットとして該当ユーザーが所属しているフォルダーのプロセスを実行できる。唯一の前提条件は、十分なAttendedライセンスがあることである。

2. 移行するエンティティについて プロセス

- モダンフォルダーごとのプロセスを作成する。
- プロセスはモダンフォルダーごとのエンティティであり、展開されているフォルダーでのみ実行できる。

クラシックフォルダー



モダンフォルダー



- ロボットグループはモダンフォルダー自体に置き換えられる。
- プロセスに UiPath.System.Activities パッケージが使用されている場合、モダンフォルダーで実行するには **19.9 以上**のバージョンが必要。※

※OC関連のアクティビティまたはOCに対するAPIコールなどを行っているワークフローの場合のみ

2. 移行するエンティティについて アセット

- モダンフォルダーごとのアセットを作成する。
- アセットはモダンフォルダーごとのエンティティであり、デプロイされているフォルダーにのみ表示される。
- 同じ名前のアセットを複数のフォルダーで定義でき、値やタイプが異なることを実現できる。

ロボットごとのアセットためのワークアラウンド



ユーザーごとのアセット

UiPath Test1 > Test3

テナント
アクション
マイフォルダー
検索
My Workspace
Default
Test1
Test2
Test3
testying

アセットを追加

アセット名*

説明

グローバル値

Text *

グローバル値を有効化すると、下の表で優先されない限り、すべてのユーザーが値を受け取ります。

ユーザー	値

必要に応じて特定の値をユーザーごとに追加することもできます。

グローバル値あるいは特定ユーザーの値を指定できる (20.10~)

- 従来のロボット（標準マシン+ユーザー）ごとのアセットがなくなるため、移行するためのワークアラウンドが必要となる。マシンごとに個別のマシンテンプレート、および各マシンテンプレートに関連付けられたアセットを持つフォルダー/サブフォルダーを作成する必要がある。
- 20.10からユーザーごとのアセット機能が導入した。

2. 移行するエンティティについて キューとその他のフォルダーごとのエンティティ

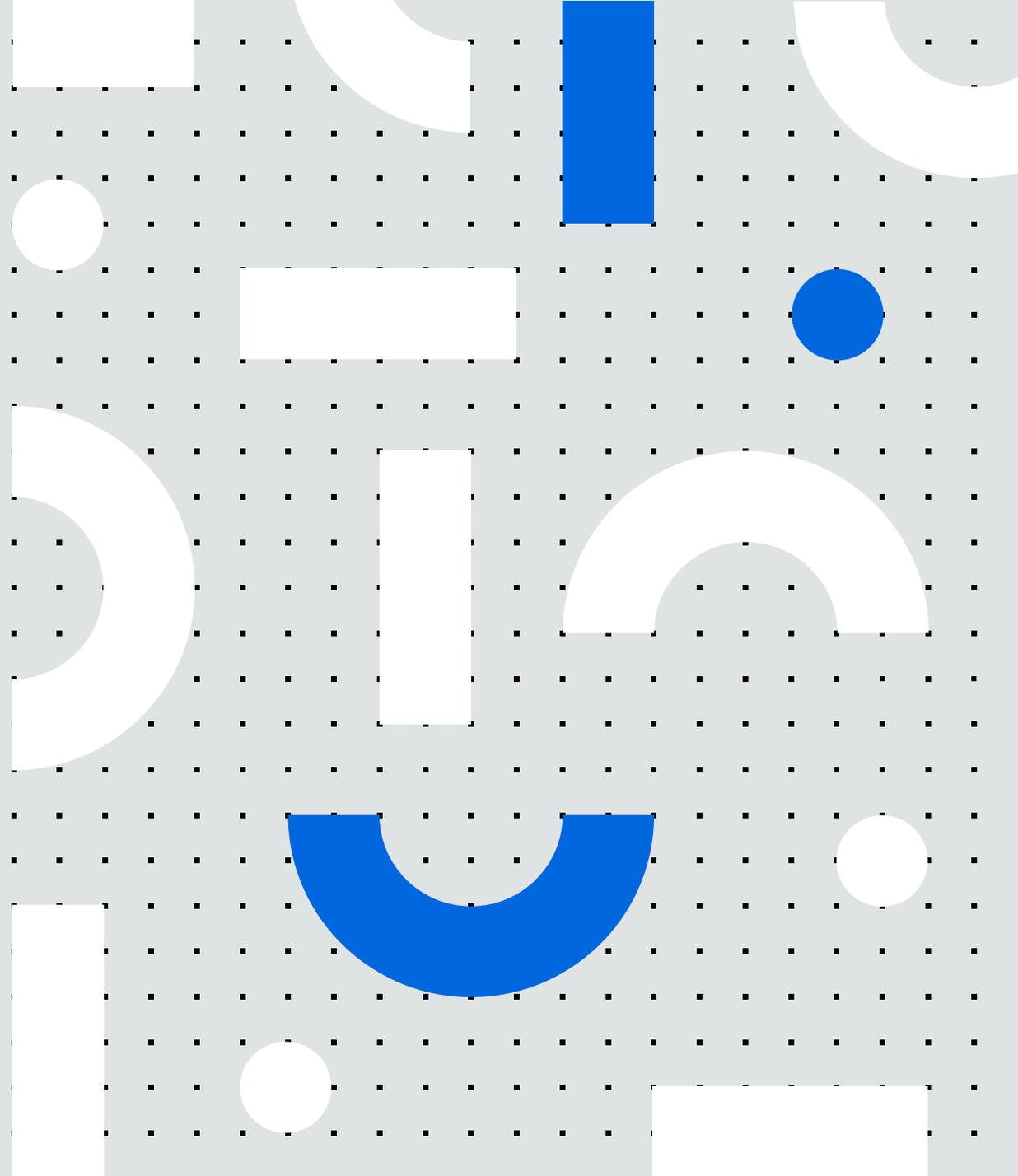
- キューなど他のモダンフォルダーごとのエンティティを作成する。
- キュー、ストレージバケット、ジョブ、トリガー、ログもフォルダーごとのエンティティとなる。

キュー

ストレージバケット

- 1つのキューが、従来の異なるロボットグループに属する複数のプロセスによって共有される場合、モダンフォルダーに移行する際にワークアラウンドが必要となる。
- キューを1つのフォルダーに定義して、そのキューを使用する2番目のフォルダーのすべてのユーザー/グループにも、十分な権限（閲覧・作成・編集）を付与する必要がある。

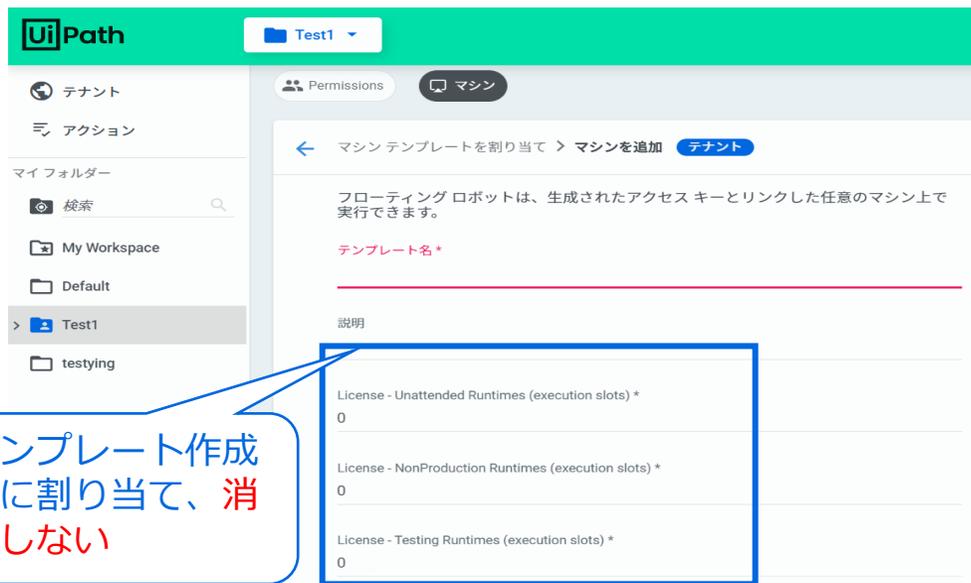
3. ライセンスの考え方



3. ライセンスの考え方 ライセンスの割り当て

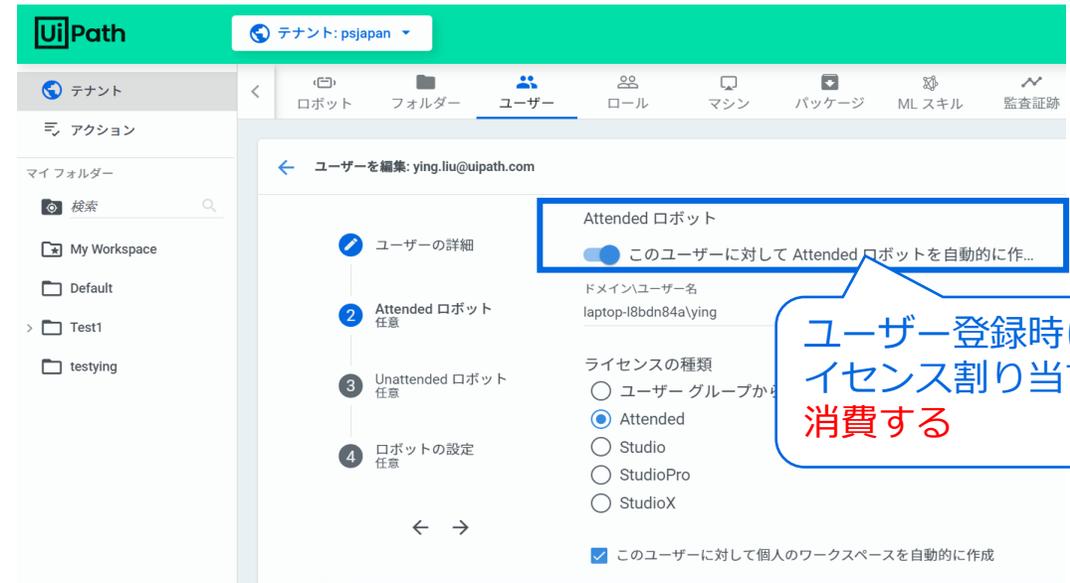
URのランタイムライセンスはモダンフォルダーのマシントプレートが作成する時点で割り当ててる。割り当ててるタイミングにランタイムライセンスが消費されない。
ARのライセンスはテナントレベルでユーザー登録時に割り当ててる。割り当ててるタイミングにライセンスが消費される。

マシンテンプレートにURのライセンス割り当て



テンプレート作成時に割り当て、消費しない

ユーザーにARのライセンス割り当て

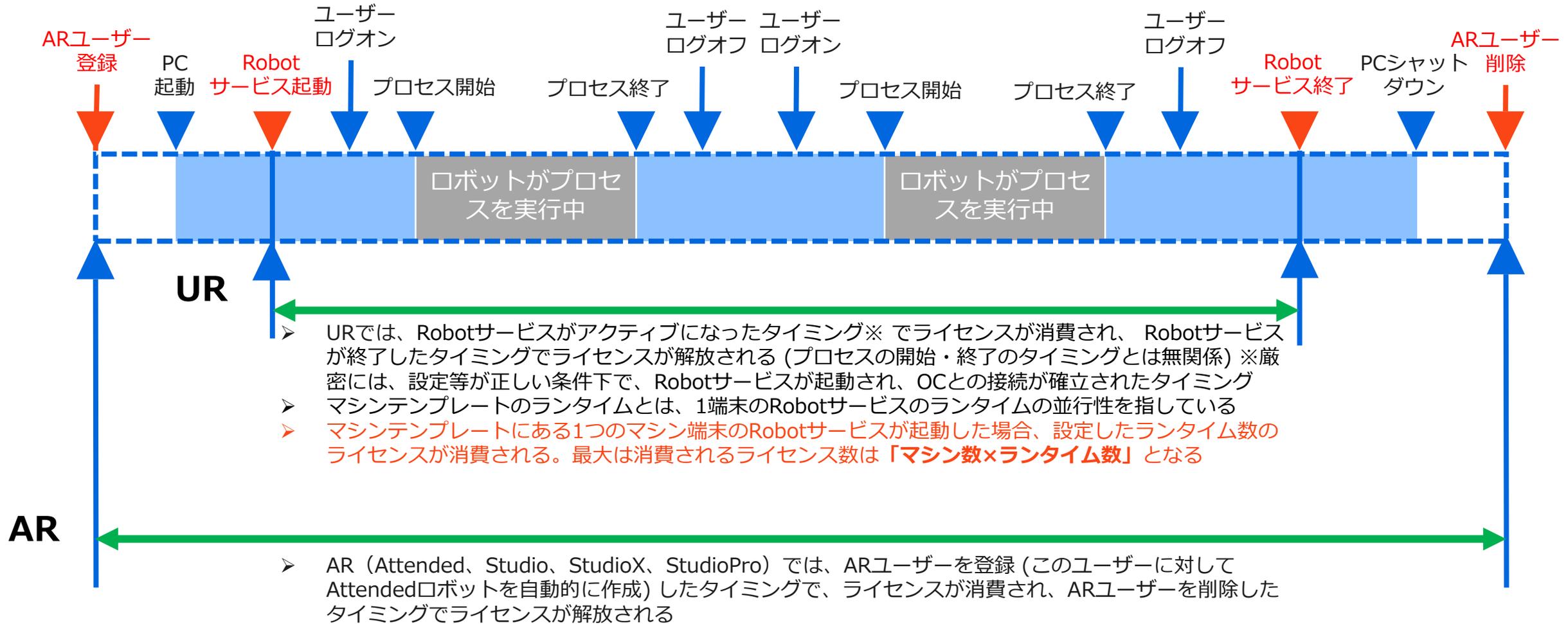


ユーザー登録時にライセンス割り当て、消費する

- URである場合、**1 端末の最大同時実行ジョブ数**をランタイムライセンス数としてマシンテンプレートに割り当ててる必要がある。該当マシンテンプレートが**消費可能の総計ランタイム数**ではない。
- URライセンスはマシンが取得する。ARライセンスはユーザーが取得する。

3. ライセンスの考え方 ライセンスの消費と解放

AR、URライセンス利用数カウント(消費と解放)の考え方は以下にある。



Thank you



Legal Copy: Es quate in preperu mquaspitatia nobitiu menduntiam non nem facimen estrum faceaturenia voluptist, sum, voluptatiis et quodit aces del imi, quidell aborepello beat quatatus, sam im el et officiis estrum facepedio quae nonserum, ex et que doluptatius, que cuptureped quidi tentoresto moluptati odionecea nia quis ilit ma videbitesci ra poruntin cum con nost, sedis ex explab imporem. Hillore peria velis quae et mod quia sed ma volo temossitio que as sinci dem qui occulpa si ommolore susanda nihitis ellamet officiisit volupta temporumqui bero et quis undis eos elique pario. Et moluptae solore velicil itassi omnihiciis entempor re, voluptiunt occumquam, a verae pre debitat exerum voloriandi alit porehenihit, omnim eum cum venihit enihill enihillit, aut qui am dollam re duntio tene sunt.